

ケルン大学の図書館を利用して 思うこと

教育学部教授

瀧川 一幸

88/89年に渡ってドイツのケルン大学の図書館を利用した。その経験から図書館のすばらしさや在り方を教えられた気がしている。もっともケルン大学の創立は古く、また学生数も4万を越えている大学だから、香川大学とは単純には比較できないことを断っておく。

ドイツの大学は沢山のInstitutに分かれている。そして大学図書館とは別に個別分野の図書館がある。これらInstitutの図書館は、本館とは機能分化されていた。本館でも閲覧は出来たが、むしろ貸出が中心のように見受けられた。そしてInstitutの図書館は、原則として貸出禁止で、学生の勉学のための閲覧が中心業務であった。そのためか、2つのことが目についた。一つは、基本図書が開架でみごとに揃って並んでいたこと、もう一つは、閲覧室の片隅にコイン式のコピー機が5台ズラッと並んでいて、学生の列が絶えなかったことである。

ドイツ人の性格に「徹底性」というのがある。何かやるなら徹底的にするという性格である。図書館にもこれが見受けられた。基本図書が見事に揃えられていた。これだけ見事にそろえるには、綿密な調査と長年の努力が必要である。このため、偶然だったのかも知れないが、講義の際に教授はしばしば引用文献のページを厳密に述べていた。学生も必要な所のみをコピーしていた。こうした点を見れば、「勉強が出来ない」と言う言い逃れが通らない。熱意さえあれば、図書館へ行けば研究が出来る。しかも学生は、高価な文献でも自分の選んだテーマに対する必要な基本文献をすべて手に入れることが出来る。何か感動的なものを覚えた。

本館の貸出中心の機能も素晴らしかった。大学周辺には、沢山のコピー機を揃えた店がアチコチに見受けられた。大学の図書館よりいくらか安い。本館で本を借りだして、コピーすることが実に便利に出来た。

香川大学でも本館とは別に、そこへ行けば学生

がすっかり研究に没頭できる図書館は出来ないものだろうか？そこには、必ず基本文献がズラリと並んでおり、何が基本文献かが一目で解り、いつでも手にして読めることが可能な、ゼミナール図書館とでも言えるような図書館は、必要なのではなからうか？

図書館の利用について

農学部助手

田村 啓敏

一昨年カリフォルニア大学に留学した時に、実験の合間に研究室内のパーソナルコンピューターから通信ケーブルを使って、学内の図書目録、化学に関する論文抄録である、Chemical Abstracts (CA) の検索 (STN: データ提供所) ができた。CA検索 (STN) は大学の場合には格安料金にて利用でき、気軽に使うことができた (使用料は毎月学科図書館が電話会社から手にいれた使用明細書に照らし、各研究室の使用料金を割出す)。何度か使ってみるうちに、検索データはすぐにプリントアウトせず、コンピューターのディスクに直接保存することを覚えた。このほうが電話回線の使用時間が短く効率的だからだ。また、私とおなじ研究室にいたドイツ人のポストドクは留学中も本国の研究者と電子メールを使い連絡をとっていた。電子メールも研究室から直接転送しており、日本にも転送できるのだろうかと思味を持った。

7-8年前日本の図書館で初めてCAを利用したときはまだ使用料金が高く、使用時間が長くなると焦ってしまい目的を十分達成できなかった。その時の印象が悪くその後、文献検索は行ったことはなかった。エレクトロニクス分野でアメリカの技術力はかなり普及していることを実感した。

帰国して香川大学でCA検索のサービスが受けられることを知り、多少慣れ親しんでいたので農学部分館の端末から利用した。フロッピーに検索結果を取り出すこともでき、ほとんど米国で利用したのと同じ感覚で使えることが分った。検索結果は研究室に持ち帰り、 unnecessary 文字を除いた後、プリントアウトしている。香川大学図書館は決して情報化時代に乗り遅れていないと思う。